

## 愛

私の手違いで、「灯」に寄稿したつもりの方が「声」欄に出てしまった。内容が「声」向きでなく、文に登場する二人の婦人のお気持ちを描いたのではと、大いにあわてた。拙文は、母と姑せつがんの二人に心から仕える婦人に感動したことを記したものである。

早速そのお一人からお便りを頂いた。未知の方ではあるが、人間のまっとうさがにじんできて、さらに私は感動させられた。

「読み始めてこれは私のことではと驚きました。主人もこんな普通のことかと言いながらも、お袋が喜ぶだろうとうれしげな顔をしました。母たちを見るのは当然よね、と同意を求める私に、そういうことは十年世話してから言えよ、と厳しい答えです。苦勞が足りないのです、私はきれいごとになってしまいかもしれませんが、母と姑の両方を大事にしたいことは、主人が私の母や妹に優しいだけに、いっそう強く感ずるのです」。

後に続く言葉がすごくよい。「子供たちも早くじいちゃん、ばあちゃんの所に帰りたい。僕はたとえ非行少年になつてもじいちゃん、ばあちゃんには逆さからえんなあ、と愛らしいことを言います。」。

愛に包まれる者は愛にあふれる。この子の言葉は最高。この国の状況下では、子ら皆が非行への恐れを抱いている。からくもそれから彼らを防護しているものはただ一つ、だれかが自分を本気で愛してくれているという意識である。

私は幼くして母に死別し、貧しさに育ち、まさに非行の温床にあつたが、からくも非行に抵抗できていた。それは優しい祖母がくりかえす「お前の母は生きている時から神様だった」という言葉が支えだった。そして若き日カント哲学に就く。カントは教えた。―天上の星と内なる良心が輝いて我を導く。今老境に至つて、幼児の如く、ああ、神なる母が我を引き寄せる―しみじみ母が思われてくる。

(一九八三年十二月五日)